

洋図書の NOTE フィールドにおける乱用状況の時系列的解析

名古屋大学附属図書館 情報システム課 目録情報掛
萩 誠 一

Abstract

学術情報センターの総合目録データベース図書書誌ファイルのなかで、AL フィールドに記述できる会議名や展覧会・学会名などを NOTE フィールドに記述している書誌を見出すことがある。これらの問題のある書誌は作成されてからしばらくの間、訂正されることが少なく、会議名や展覧会・学会名などをキーワードとして書誌情報を検索するときに検索漏れを起こす原因となる。このようなことを避けるためには、新規書誌作成の指針となるコーディングマニュアルの NOTE フィールドの記述に関する項目に、NOTE フィールドだけでなく他のフィールドにも同様の記述をする書誌事項の例をあげるべきである。

Introduction

神戸大学の菊池一長氏が平成 9 年度総合目録データベース実務研修レポートでも述べているように、NOTE フィールドは、現物の図書を目前にして目録を作成している図書館員にとって便利なフィールドである。なぜならば、このフィールドは他のフィールドに比べて必要に応じて目録作成者の裁量で自由に記述できるからである。そのため、NOTE フィールドを安易に利用する傾向があり、時には他のフィールドに記述できる書誌事項も NOTE フィールドに記述していることがある。特に、NOTE 注記の記述例集に会議録や展覧会のカタログなどの NOTE 注記記述例が挙げられていることから、本来 AL フィールドに記述できる会議名や展覧会・学会名などを NOTE フィールドに記述している書誌がある。その一方で、Webcat などの書誌情報検索では NOTE フィールドが検索の対象になっておらず、NOTE フィールドに記述したことが書誌情報検索の際に十分に生かされていないことがある。今回の調査では、このような NOTE フィールドの乱用について、1999 年 4 月 1 日から 1999 年 9 月 16 日までに新規作成された総合目録データベース図書書誌ファイルのデータを計算機処理して調査し、書誌情報検索を考慮した目録作成用マニュアルのあり方を考察した。

Method

上記の事実を容易に調査するために、学術情報センターの総合目録データベース図書書誌ファイルの、TTL が jpn、kor、chi ではなく、TXL に jpn、kor、chi を含まない、1998 年 4 月 1 日から 1999 年 9 月 16 日までに新規作成された書誌データ 661148 件（書誌の記述が AACR2 に従っているデータ。いわゆる洋図書書誌データ。以下、「全書誌データ」と

キーワード	全書誌 (件)	NOTE記述あり (件)	NOTE記述あり/全書誌 (%)
symposium	3242	912	28.1
conference	4905	1731	35.3
catalog	2390	1184	49.5
exhibition	1182	845	71.5

表1 キーワードのある書誌と NOTE 注記のある書誌の件数

いう。)を利用した。この書誌データから Perl4 (一部 Perl5) を用いて NOTE フィールドに、表1に示した会議名や展覧会・学会名に密接に関連した単語を含むデータのみ(以下、「NOTE 記述のある書誌データ」という)を抽出した。さらに、ALID フィールドと著者名典拠ファイルの ID フィールドとを比較し、TYPE フィールドが c あるいは m である ALID フィールドを含む書誌データと、そのような ALID フィールドを一切含まない書誌データに分けた。前者を AL フィールドに会議名や展覧会・学会名を記述している書誌データ(以下、「AL 記述のある書誌データ」という) 後者を AL フィールドに記述できるにもかかわらず記述していない書誌データ(以下、「AL 記述のない書誌データ」という)とした。

これらの書誌データを計数し各々を比較することで、AL 記述のない書誌データが、NOTE 記述のある書誌データの中でどの程度あるのかを算出した(図1)。さらに、AL 記述のな

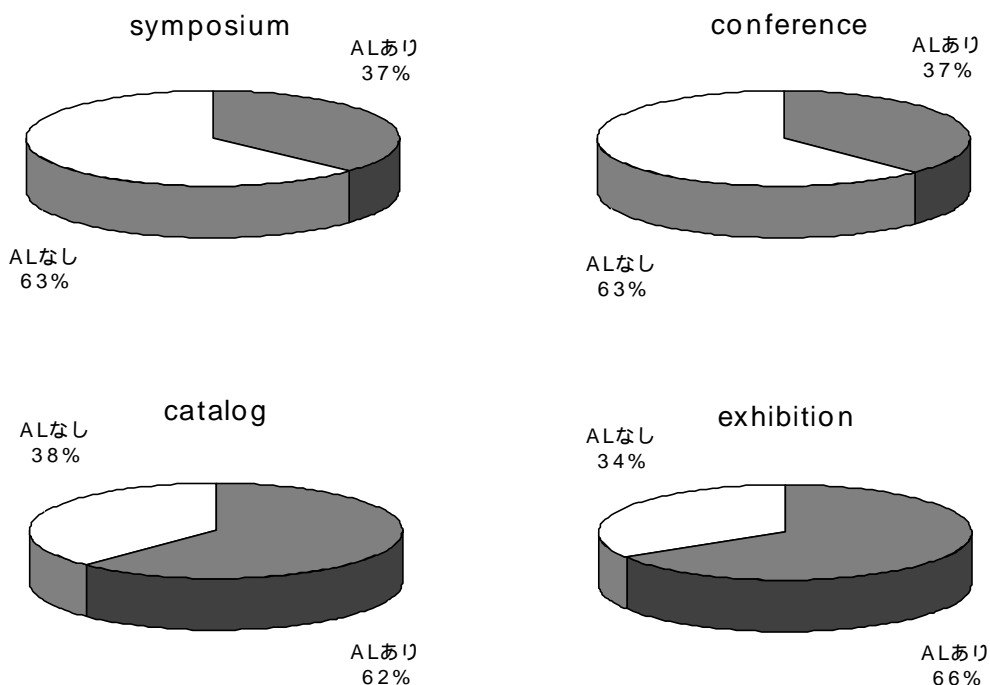


図1 NOTE フィールドに組織名がある書誌の AL フィールド

い書誌データに対して、他のフィールドに表1の単語の記述がないかを調べることで、他のフィールドに会議名や展覧会・学会名がないか調べた(図2)。

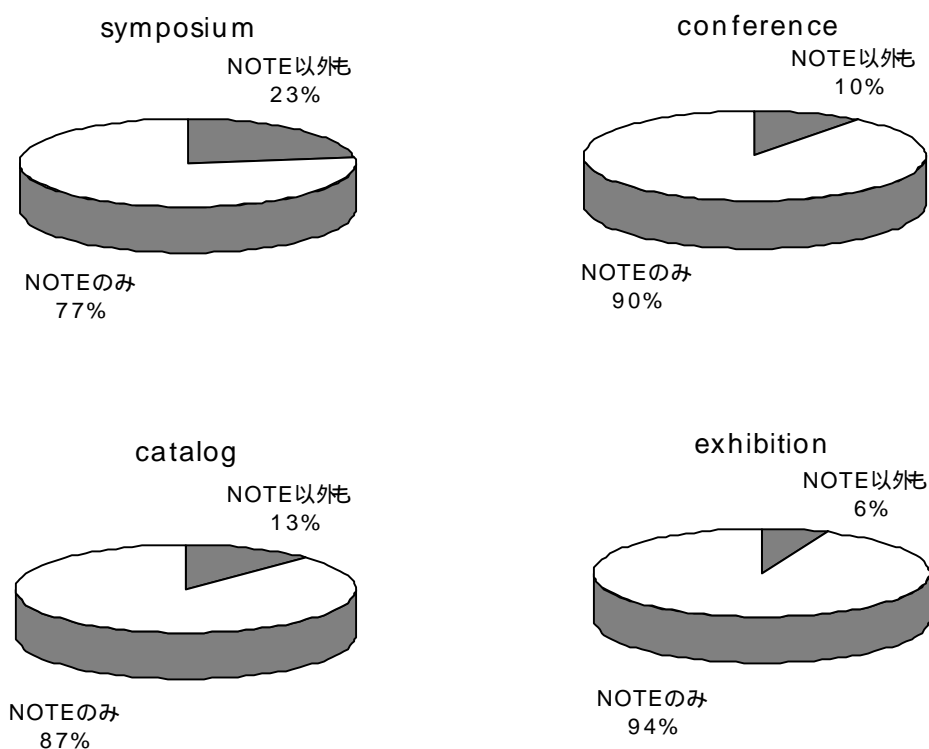


図2 AL 記述のない書誌の組織名の記述

また、NOTE 記述のある書誌データに対する、AL 記述のない書誌データの比率を、書誌作成日(CRTDT フィールドの日付データ)で2ヶ月ごとに区分して集計し算出した(図3)。書誌を作成した日より後に書誌に何らかの加筆・訂正をすると、RNWDT フィールドにCRTDT フィールドとは異なる日付が登録される。このことを利用してCRTDT フィールドとRNWDT フィールドとを比較し、1998年4月1日から1999年9月16日までに新規作成された全書誌データのうち、何らの訂正も加えられていない書誌データ(以下、「未訂正書誌データ」という)の比率を、書誌作成日で2ヶ月ごとに区分して集計し算出した。

Result and Discussion

1998年4月1日から1999年9月16日までに新規作成された、AACR2の記述文法に従う書誌データ(全書誌データ)から、会議名や展覧会・学会名を書誌のいずれかに記述して

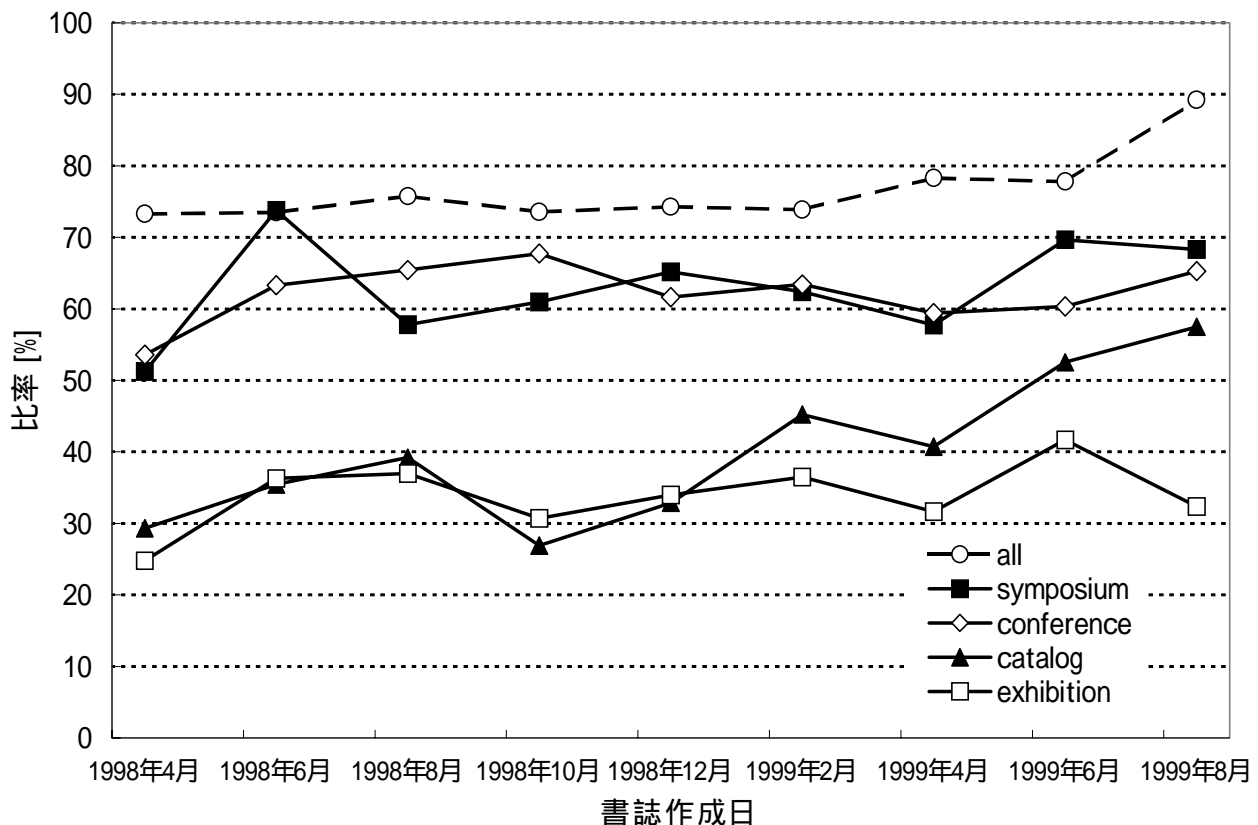


図3 新規書誌に対する訂正の変容

いる書誌データを抽出し、さらに、会議名や展覧会・学会名を NOTE フィールドに記述している書誌データ (NOTE 記述のある書誌データ) を抽出した (表 1)。いずれかのフィールドに会議名や展覧会・学会名を記述している書誌データの多くが NOTE フィールドにもそれらを記述していた。この結果は、表 1 の単語が調査対象のキーワードとして優れていることを示している。

さらに NOTE 記述のある書誌データから会議名や展覧会・学会名を NOTE フィールドと AL フィールドの両方に記述しているもの (AL 記述のある書誌データ) と、それらの組織名を NOTE フィールドのみに記述しているもの (AL 記述のない書誌データ) とに分けた (図 1)。NOTE 記述のある書誌データの 4 割から 6 割は、AL フィールドに会議名や展覧会・学会名を記述していなかった。この結果は、新規書誌作成時において、NOTE フィールドが乱用され AL フィールドが十分に活用されていないことを示している。

また、AL 記述のない書誌データにおいて、他のフィールドに会議名や展覧会・学会名などがないかを調べた (図 2)。その結果、AL 記述のない書誌データの 1 割から 2 割程度しか他のフィールドに記述していなかった。図 1、2 の結果は、Webcat などの書誌情報検索を使って会議名や展覧会・学会名などをキーワードとして検索すると検索漏れを起こすことを示唆している。

このような記述漏れについては、発見館が作成館の許諾を得ることなく記述を加えることができる。NOTE 記述のある書誌データと AL 記述のない書誌データを書誌作成日で 2 ヶ月ごとにまとめて、NOTE 記述のある書誌データに対する AL 記述のない書誌データの比率の変化を調べたところ、どのキーワードにおいても左肩下がりをしており、作成されて

から月日が経つにつれて AL 記述のない書誌データが若干、減少することは確認できた(図 3)。わずかながら、NOTE フィールドに記述している責任表示が AL フィールドにも記述するように訂正されていることが推定できる。しかし、全書誌データと全書誌データの CRTDT フィールドと RNWDT フィールドが一致しているもの(つまり書誌が作成されてから一度も加筆・訂正されていない未訂正書誌データ)を書誌作成日で 2 ヶ月ごとにまとめて、全書誌データに対する未訂正書誌データの比率の変化を調べたところ、書誌を作成してからおよそ 8 ヶ月間は未訂正書誌データの比率が減少し続けたが、その後、その比率は定常化(75%程度)していた。このことは、加筆・訂正を必要とする書誌の多くが、作成されてから 8 ヶ月以内に加筆・訂正されていることを示している。書誌全体では新規作成されてからおよそ 8 ヶ月間で訂正されるべき書誌が定常化しているにもかかわらず、この間に今回注目している AL 記述のない書誌データが激減することはなかった。これは短期的には AL 記述のない書誌データに記述が付け加えられることが少ないことを示している。したがって、新規に書誌を作成するにあたっては他館の訂正を頼ってはいけい。AL 記述のない書誌データが作成されないようにするには、作成の基準となるマニュアル類に一部加筆する必要がある。

AL フィールドの記述対象については、学術情報センターの目録システムコーディングマニュアルの 4. 3. 2D に具体的に示されている。今回、調査の対象としている NOTE フィールドの記述に基づく AL フィールドの記述については 4. 3. 2D の D2 に示してある。4. 3. 2D の D2 は以下のようなものである。

「ED フィールド、PUB フィールド、CW フィールド、NOTE フィールドに記録した個人、団体、会議の名称等について、当該名称に対する AL フィールドをそれぞれ作成することができる。」

しかし、この項目をそのまま鵜呑みにしてしまうと、NOTE フィールドに記述している責任表示は、目録担当者の自由な判断で AL フィールドに記述しなくてもよいということになる。そうなると、NOTE フィールドにのみ記述している責任表示は、書誌情報検索の対象にならなくなってしまう。これでは、書誌情報検索の際に、目録担当者でマニュアル作成者の恣意的ミスによる検索漏れを起こしてしまう。

一方、NOTE フィールドの記述については、目録システムコーディングマニュアル 4. 2. 7F の F2. 2 で今回の問題に触れる内容を取り上げている。F2. 2 では、以下のようにあげられている。

「AACR2 の 1.7B で示されているもののうち、次のものについては、AACR2 とは別扱いとする。

ア) 次に示す項目について、検索上有益なものは、VT フィールドに適切なコードを付して記録する。なお、「OH」を付して記録した場合は、必ず情報源を注記する。

1. 7B4 (別の形のタイトル)
1. 7B5 (並列タイトルとタイトル関連情報)

1. 7B12 (シリーズ)

- イ) 1. 7B18 (内容)のうち、著作単位のタイトルおよび責任表示に該当するものについては、CW フィールドに記録する。」

この項目が要請していることは、「AACR2 に従えば NOTE 注記に記述する書誌事項でも、総合目録データベースでは検索対象となる別のフィールドがあるのでそのフィールドに入れよ」ということである。一方、今回の調査対象とした会議名や展覧会・学会名は AACR2 でもアクセスポイントとして挙げられており、AACR2 に忠実に従えば今回のようなことは起こらない。会議名や展覧会・学会名を NOTE フィールドに記述するのではなく、AL フィールドに記述することをコーディングマニュアルのこの項目で指摘することは、本来この項目の方針とは合致しない。むしろ、ニュースレターなどで目録担当者に注意を促すほうが正論なのかもしれない。しかし、記述ミスが目立つ書誌事項についてはわかりやすく一つにまとまっていて、どの目録担当者も容易に把握できるところに挙げられるべきである。実際、複数のマニュアルを参考して目録を作成すると、マニュアル間の相違のために記述漏れや記述フィールド先の間違いを引き起こすこととなる。日常の目録作業では AACR2 や NCR とコーディングマニュアルが最も利用されるマニュアルである。会議名や展覧会・学会名を NOTE フィールドに記述するのではなく、AL フィールドに記述することと注意書きすることを AACR2 や NCR に掲載されることを望むのは難しい。やはり加筆するのはコーディングマニュアルであろう。

では、現状のコーディングマニュアルでは、図書書誌の NOTE フィールドの記述についてどのように扱っているのであろうか。コーディングマニュアルの NOTE フィールドの記述に関する図書と雑誌の項目数を比較してみると(表2) 図書が9項目、3ページに対して雑誌が29項目、5.5ページに分けて詳細に記述されていた。AACR2 では図書と雑誌で同じ程度の取り扱いであり、また、共通の項目として記述の総則を掲げているにもかかわらず、コーディングマニュアルでは項目数でこのような差があった。このことも、洋図書における NOTE 注記の乱用につながっていると考えられる。

	洋図書	洋雑誌
AACR2	21項目 (4.5 p.)	22項目 (6 p.)
コーディングマニュアル	9項目 (3 p.)	29項目 (5.5 p.)

表2 マニュアル類における NOTE 注記の記述

また、図書は目録をとるために出版されているわけではないので、AACR2 やコーディングマニュアルだけで多種多様な図書に対応できない。柔軟性のある NOTE フィールドは、その点で重要である。しかし、柔軟性を重視するあまりにその記述に統制がないことは、統制されていることを前提としている目録の精神とは相容れない。この矛盾に対応するために、定形注記などを掲載した NOTE 注記の記述例集が出版されている。そこで、どのような NOTE 注記の記述例集が学術情報センター参加館で利用されているのかを、キーワードとして「catalog*」と「note*」を用いて Webcat で検索した。その結果、10 タイトル(版の違いも含む)ほどの NOTE 注記の記述例集がヒットした。これは、NOTE フィールドの記述方法として総合目録データベース参加館で共通のマニュアルがあるのではなく、複

数のマニュアルを利用していることを示している。これら NOTE 注記の記述例集には、今回注目した会議名や展覧会・学会名など以外にも、総合目録データベースでは他のフィールドに記述すべき項目が NOTE 注記の記述例として挙げられている。このことも、NOTE フィールドの乱用につながっていると考えられる。

以上の考察結果から、以下のことを見出した。

- 1) 総合目録データベース図書書誌ファイルの NOTE フィールドに乱用があった。
- 2) 誤った NOTE フィールドを他のフィールドに書き換えられることはあっても、他のフィールドを書き換えるほどの頻度では行われていなかった。
- 3) 洋図書の NOTE フィールドに関するコーディングマニュアルの記述が、洋雑誌のそれに比べて不十分であった。
- 4) NOTE フィールドの記述例集が、総合目録データベース参加館で統一されていなかった。そのために、さまざまな参考資料が利用されている恐れがある。

これらのことから、コーディングマニュアルの NOTE フィールドの記述に関する項目に、本来、他のフィールドに入れるべきものの事例をあげて注意を促す必要がある。

References

- “目録システムコーディングマニュアル”. 学術情報センター.
- Michael Gorman, Paul W. Winkler. “Anglo-American cataloguing rules 2nd ed. 1988 rev”. American Library Association, c1988
- Florence A. Salinger, Eileen Zagon. “Monograph cataloging notes”. Knowledge Industry Publications, c1981
- エイチアイ. “実用 UNIX Perl ハンドブック”. ナツメ社, 1998
- 羽山博. “アスキー・ラーニングシステム 応用コース 応用 UNIX”. アスキー, 1993
- 中西隆. “A アドバンストリファレンス UNIX 活用ハンドブック”. 技術評論社, 1994